

《担当者名》永易裕樹 nagayasu@hoku-iryo-u.ac.jp

【概要】

口腔外科は口腔を構成し、また口腔に関連する組織・器官の各種疾患のうち、主として観血的手術療法の対象となるものの診断と治療を行う臨床科であるが、そのほかに口腔粘膜疾患あるいはある病期の顎骨炎の様な薬物療法を主体とする疾患も含まれる。疾患の部位は口唇、頬、軟口蓋、舌、口底などの軟組織部と、上・下顎骨およびそれらに植立する歯の硬組織部に大別され、口腔に関連する器官は顎関節、唾液腺および所属リンパ節などである。口腔外科で取りあつかう疾患の種類は、上記各部位の先天異常、発育異常、損傷、炎症、特殊な骨疾患、嚢胞、良性・悪性腫瘍、神経疾患などである。

【学修目標】

口腔機能障害の言語聴覚療法を行う上で、その基礎となる口腔・顎・顔面の疾患について、病態、検査法、治療法を学ぶ。また、言語聴覚療法と関係する、口腔、顎、顔面の機能障害の治療法と歯科領域における言語聴覚士の役割を学ぶ。

1. 口腔外科で取り扱う疾患と治療法の概要を理解する。
2. 唇顎口蓋裂の病態と治療法を学ぶ。
3. 各種の口腔疾患により生じる言語障害と治療法を学ぶ。

行動目標

1. 口腔外科に関連する口腔・顎・顔面領域の先天異常をきたす疾患を説明できる。
2. 口腔外科に関連する口腔・顎・顔面領域の発育異常をきたす疾患を説明できる。
3. 諸突起の融合不全により生じる疾患を説明できる。
4. 顎変形症の症状、治療法を説明できる。
5. 口腔・顎・顔面領域の嚢胞の定義、種類、症状を説明できる。
6. 口腔・顎・顔面領域の良性腫瘍の種類、症状を説明できる。
7. 口腔・顎・顔面領域の悪性腫瘍の種類、症状を説明できる。
8. 良性腫瘍と悪性腫瘍の相違を説明できる。
9. 口腔・顎・顔面領域の炎症の症状、検査所見、治療法を説明できる。
10. 歯性感染症の特徴について説明できる。
11. 口腔・顎・顔面領域の損傷と治療法について説明できる。
12. おもな口腔粘膜疾患について説明できる。
13. おもな唾液腺疾患について説明できる。
14. おもな顎関節疾患を説明できる。
15. 口腔・顎・顔面領域のおもな神経疾患・心因性疾患について概説できる。
16. 口腔・顎・顔面領域のおもなリンパ系疾患を概説できる。
17. 唇顎口蓋裂の原因、治療法について説明できる。
18. 唇顎口蓋裂により生じる障害を説明できる。
19. 唇裂・口蓋裂の手術時期、手術法を説明できる。
20. おもな口腔疾患により生じる言語障害の症状、種類を説明できる。
21. おもな口腔疾患により生じる言語障害の治療法を説明できる。
22. 補綴的発音補助装置の種類と適応を説明できる。

【学修内容】

回	テーマ	授業内容および学修課題	担当者
1	口腔外科で取り扱う疾患 舌・口底・頬粘膜・口唇の異常	口腔外科の役割、対象となる疾患舌・口底・頬粘膜・口唇に異常をきたす疾患の病態と治療法を学修する 授業の後半にテーマに関連する小テストを実施	永易裕樹
2	顎骨の先天異常・発育異常	顎骨の先天異常・発育異常をきたす疾患の病態と治療法を学修する 授業の後半にテーマに関連する小テストを実施	永易裕樹
3	顎・顔面・口腔領域の炎症、外傷	顎・口腔領域の炎症、外傷の病態と治療法の概要を学修する 授業の後半にテーマに関連する小テストを実施	永易裕樹
4	顎・顔面・口腔領域の嚢胞	顎・顔面・口腔領域に発生する嚢胞の病態と治療法の概要を学修する 授業の後半にテーマに関連する小テストを実施	永易裕樹
5	顎・顔面・口腔領域の腫瘍	顎・顔面・口腔領域に発生する歯原性腫瘍、非歯原性腫瘍、良性腫瘍および悪性腫瘍の病態と治療法の概要を学修する	永易裕樹

回	テーマ	授業内容および学修課題	担当者
		授業の後半にテーマに関連する小テストを実施	
6	顎関節疾患、唾液腺疾患、神経系疾患・心因性疾患、リンパ系疾患	顎関節疾患・唾液腺疾患、神経系疾患・心因性疾患、リンパ系疾患の病態と治療法の概要を学修する 授業の後半にテーマに関連する小テストを実施	永易裕樹
7	唇顎口蓋裂の病態と治療	唇顎口蓋裂の病態と治療体系および言語聴覚士の役割を学修する 授業の後半にテーマに関連する小テストを実施	永易裕樹
8	口腔疾患による言語障害	口腔疾患による言語障害と治療法を学修する 授業の後半にテーマに関連する小テストを実施	永易裕樹

【授業実施形態】

面接授業と遠隔授業の併用

授業実施形態は、各学部（研究科）、学校の授業実施方針による

【評価方法】

定期試験100%

【教科書】

道健一 編 「言語聴覚士のための臨床歯科医学・口腔外科学」 医歯薬出版

【参考書】

McWilliams, B.J. 著、和田健 他 訳 「口蓋裂 言語障害の病理・診断・治療」 医歯薬出版 1995年

富田喜内 他 監 「最新口腔外科学 第4版」 医歯薬出版 1999年

伊東節子 著 「口蓋裂患者の言語障害と治療」 クインテッセンス出版 1983年

高橋庄二郎 著 「口唇裂・口蓋裂の基礎と臨床」 日本歯科評論 1996年

【備考】

講義ごとに追加プリントを配付するとともに、小テストを実施する。

【学修の準備】

予習は、次回の講義範囲の教科書、参考書を読み（80分）、その講義の理解が深まるように努めること。復習は、講義終了時に行う小テストにて、理解不足の部分を次回講義までに補うこと（80分）。

【ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）との関連】

（DP3）言語聴覚士として必要な科学的知識や技術を備え、心身に障害を有する人、障害の発生が予測される人、さらにはそれらの人々が営む生活に対して、地域包括ケアの視点から適切に対処できる実践的能力を身につけている。